今年のさくら探訪記

藤原　道夫

　さくらの開花情報が話題になる頃から、毎年決まってそわそわし始める。これは日本人の遺伝子に組み込まれている性癖だ、と思う。それが強く出るか弱いのか人さまざま。さくらが終わると少々呆れながら見てきた風景を振り返える。この春はコロナ禍からの開放感を味わうかのように人出が多かった。以下に浮かれた私のさくら探訪記。

　３月下旬に京都に出かけた。ここ数年はこの頃に祇園の夜桜を見ることができたのだが、今年はまだ莟だという。先ず醍醐寺を訪ねようと計画していたところ、ここも未開という情報を得て、急遽平野神社に行ってみた。紅白の幕が張り巡らされてさくら祭りの準備が整っているものの、花は開いていない。さくら並木を進んで中門に達すると、脇にある「平野魁」と呼ばれる枝垂桜が 3、4 分咲いているのが目に入ってきた。数年振りの再会だ。
　ここから京都御苑の西北端に移動した。苑内に花が少し早く咲く糸桜の古木が数本あることを知っていた。まだ満開の手前だったが、花を付けた優雅な姿を楽しむことができた。傍らのヤマザクラは地味ながら満開だった。

　都内で毎年行くのが千鳥ヶ淵。今年は田安門から北の丸公園に入り、石垣の上から花を眺めた。心なしか花の密度が以前より薄くなっているよう。枝が切られたところが散見され、枯れ、根元から切られた樹もある。
　公園を抜けて代官通りを歩く。皇居側の狭い道はランナーがひっきりなしに通っていて、歩くのがはばかれた。ここ 1, 2 年の間に歩道が整備され、ヤマザクラの並木をゆっくり見物できた。花を見ながら半蔵門まで堀沿いの歩道をのんびり歩く。国立劇場に着くと前庭にある 3 本の神代曙が華麗な花を咲かせ、その下に人々が群がっていた。前日に見た神代植物公園にある原木はほとんど枯れ、わずかに残った枝に花が付いている状態だった。
　東京春音楽祭のコンサートが始まる前に上野公園をぶらぶら歩いてみた。先ず「舞姫」を見にゆく。沢山の花を咲かせる立派な樹に育ったと、何故かほっとする。動物園前のエドヒガンは幹が切られ、中途から伸びた小枝に花がちらほら咲いている状態、生命力を感じる。清水観音堂前の枝垂桜は若木が元気に沢山の花をつけている。背の高い方は半分枯れてしまった。

新宿御苑は５回訪ね、早咲き・中咲き・遅咲きの桜をじっくり探訪した。ここの見どころは何といっても遅咲きの八重桜。一葉は御苑の名花とよばれるに相応しい。大樹となった福禄寿が多くの花を付けて貫録を示している。以前あった松月や普賢象は枯れてしまい、10 年ほど前に若木に植え替えられた。それらが多くの花を着けるまでに育ってきた。

最大の収穫は駿河台匂の香りを嗅げたこと。幸運なことに、５，６分咲きの花の付いている枝が顔の高さに張り出していた。これは全ての花の中で最も好ましく思っている香りで、何ともいえない気品がある。

二本松（福島県）も訪ねた。うららかな春の日だった。何本かあると聞いていた大きな紅枝垂桜を見ながら霞ヶ城址に向かおうと思っていたところ、タクシーが来る気配がない。待ち順が３番目だ、しびれを切らして歩く決心をした。枝垂桜の見物はあきらめ、案内所で貰った市街図を頼りに街の中ほどから急坂を登って「観音丘陵遊歩道」に出た。そこは自転車と歩行者の専用道路で、よく整備されていた。所々にさくらが植えられている。1 時間ほど歩いて城址西側の見晴台に出る。そこから菜の花にさくら、かなたに残雪が輝く安達太良山を見渡すことができた。知恵子はあの山の上の空がほんとうの空だと言ったとか。今日は快晴ながら春霞がかかっている。城址端の小道を通って駐車場まで下る。予想外の歩行でくたびれ果ててしまった。

駅に戻るのも徒歩になると腹をくくっていたところ、たまたま出逢ったおばあさんがもうすぐ駅行きのバスが来ると知らせてくれた。話していることがよく分からないまま、近くにあるらしいバス停まで後について行く。間もなくバスがやってきた。そのバスが城址周りのさくら並木を通り、あの展望台のすぐ傍を通って街の方に下ったのだ。くねくねとした道の両側に植えられたさくらは、千鳥ヶ淵のとは違って見事な花付きだった。バス内で感嘆の声が上がる。

駅前の終点でおばあさんがバスから降りてくるのを待ち、お礼を言う。おばあさんは一瞬にこりとし、バスの運賃が高いとぶすぶす言いながらさっさと駅の方に歩いていった。後姿に素朴な優しさが漂っている。つらい思いをした後に天と人との恵みを感じた日であった。